海の幸

渡辺喜恵子

海の幸

渡辺喜恵子

S

海の幸

一九七一年三月一〇日　発行
一九七四年七月二〇日　四刷

定　価／七〇〇円

著　者／渡辺喜恵子

発行者／佐藤亮一

印刷所／株式会社三秀舎

製本所／大口製本株式会社

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話　東京・業務部(03)二六六—五一一一
　　編集部(03)二六六—五四一一

郵便番号　一六二

振替　東京八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kieko Watanabe, 1971 Printed in Japan

海の幸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章

「失礼ですが、あなたもしや福田さんではありませんか、ああやっぱり、たねさんですね」
男は念を押すように、しげしげとたね子の顔を覗き込んだ。
背の高い男だった。白くなった無精髭がまばらにのびてその瞋め方はかなり不遠慮である。
誰だろう、この人は——
油絵百年展の会場は観客でぎっしり、身動きもとれないほどの混み方だ。人いきれでむんむんしている。
長蛇の列からはみ出され、よろめきながら襟巻をはずしたものの、たね子は途方にくれた表情で、上目遣いに男の顔を見ている。
思い出せないのだ。
もどかしかった。少しもおぼえのない顔だ。
たね子は記憶力のいい方である。たいがいのことなら忘れていないつもりだった。
「いやあ、久振りで小山先生の絵を拝見いたしましたよ」
そんなたね子におかまいなく、男はにこにこしているが、感慨無量のていだ。

「ああ、不同舎の――」
男の口調のどこかに九州訛りのあるのがわかると、たね子は懐かしそうにその顔を仰いだ。しかし、まだ男の名を思い出したわけではない。
「大変な盛会ですなァ」
男はそれがくせなのか、脂けのない薄い髪の毛をなんどもなんども掻き上げた。
「ほんとうに」
仕方なくたね子も頷く。
「小杉未醒、坂本繁二郎、森田恒友、昔の仲間はみんな素晴らしい。しかしなんといっても青木君ですよ。あの人の絵は、何時見てもまったく新鮮だ。あれほどの才能を持った人はめったに出るものではない。敬服に値しますよ。不同舎時代から群を抜いた天才でした。早く亡くなる人はやはりどこか違いますね。ああ、あなたはその後どうしていられますか。絵の方はもう止められたんですね。しかし、御健在で何よりです」
男は人混みの中を去って行った。
野尻たね子の絵など、あの男は見たこともないのであろう――
「少しも変りませんね」
と言った。
変らないことがあるものか、たね子はもうすでに八十歳、あの男だってもう八十はとっくに越している筈だ。

お互いに気持だけは少しも変りないというのだろうか。
青木繁の絵の前に立ったたね子の胸は、不意に締めつけられて、躰中の血管という血管がぱちぱち音を立てて破れそうな、激しい眩暈に襲われた。
後につづいていた学生ふうの若い男が、故意にたね子を押したが、たね子は絵の前に張られた綱に摑まり両脚をふんばって動かなかった。
目録を手にした若い女性は、食い入るように『わだつみのいろこの宮』の下図を眺めていたが、側に立っているたね子が、若き日の豊玉姫のモデルだとは少しも気付かない。
遠い潮騒のように、行列はがやがやとたね子を残して少しずつ移動した。
俺の魂は、俺の絵の中で、千万年も生きてみせる——
熱っぽく、傲慢とも思える態度で、青木繁は言った。その言葉に少しの嘘いつわりもなかったのだ。
あの頃は——
たね子はうめくような太い吐息を洩らしてようやく絵の側を離れた。追憶は後ろ髪を引き、激しい情念が心をゆさぶった。
「若かったんだわ——」
亡ぶとは一体なんだろう。生きるということは一体何を意味するのだろう。若さも老いも、束ねてみればほんの一握り、百年と保つことの出来ない生命なのに。
ぽろりとたね子の眼から不覚の涙が噴く。

上野のデパートで催された油絵百年展の会場をあとにしたたね子は、タクシーをひろって公園へ出てみた。

袴腰からこの道は、青木繁と並んでよく歩いた道だ。

春は爛漫と咲き誇る桜の下を、花が散ると燃え立つ青葉若葉。かさこそと舞い散る落葉を踏みしめて、紫の袴のすそを蹴って歩いたあの頃、一つ傘に身を寄せあってそぼ濡れながら歩いたこの道。竹之台にはまだあの思い出の水飲み場は残っているだろうか——

たね子は図書館の前でタクシーを降りた。歩いてみたかった。ひとりで歩きたい。

排気ガスと埃で木々はうす汚れ、五月の空はどんより曇っているが、それでもこの辺りには、まだ昔のおもかげが残っている。

何年振りだろう。こうしてひとりひっそりと上野の山を歩くのは。

追憶を手引きに、歩み疲れてたね子はベンチに腰を降ろし、遠くへ眼を細めながら、手提げ袋から油絵百年展の目録と眼鏡を取り出すとゆっくりと頁を繰った。

青木繁（一八八二—一九一一）

久留米市に生れ、不同舎を経て東京美術学校に学ぶ。一九〇四年卒業。在学中から白馬展に出品して鬼才を賞された。この絵はその当時、房州の海岸で描いた外光派的な作品の一つだが、のちに古事記に取材した『わだつみのいろこの宮』は美しい色彩によって彼本来の浪漫的情操を高らかにうたいあげたもの、晩年は不遇のうちに夭折した。

晩年は不遇のうちに夭折した――たしかに青木繁の晩年は不遇というしかないのだ。
おそらくはただの一度だって満足らしい思いを抱かずに、あの人はこの世を去っていったにちがいない。
たね子はこの頃になってよく青木繁の夢を見る。
年をとって眠りの浅くなったせいかもしれない。もう直き夜が明ける、もうすぐ朝が来るのだと思いながらいつの間にかうとうとと引摺り込まれるように、明け方の千切れちぎれの夢の世界へ陥ち込んでしまうのだ。
見果てぬ夢のもどかしさがたね子を追い立てるのだろうか、年をとるということは、未来のなくなるということなのだ。けれども夢に出てくる青木繁の若々しさ、青木繁は大きな声で話しかけてくるのに、何も応えないうちに眼がさめて、夢と現の中で自分はいつもいつも泣いている。
なぜ泣くのだと、たね子はもうひとりの自分に問い質すのだが――
たね子は石のように、固いベンチに坐りつづける。
「そうだ。あのひとだわ――」
たしかにあの男にちがいない。不同舎で一緒に絵を学んだ画学生。佐賀から上京したのだと言っていた、いつも黒い木綿の紋付羽織に縞木綿の袴をはいていたあの人だ。
展覧会場でたね子に声を掛けた、あの鶴のように痩せた男の顔がぴったりとその男の顔に重なる。

「これ、あんたに渡してほしいと、青木さんが置いてゆかれましたよ」
モデル台の前で熱心に絵筆を動かしていた男は、遅れてアトリエに入ったたね子が絵具を拡げるのを待って、カンバスのうしろに挟んであった紙切れを渡した。
「なあに、これ」
「見ればわかるでしょう」
「三時頃から荒川の方へスケッチに行く。一緒に行かないかって書いてあるわよ」
「そんなら行くべきですよ。青木さんに誘われて一緒にスケッチに行けるなんて、あんたは仕合せだ」
「そうかしら」
たね子は少し不服そうに唇をとがらして、スケッチブックの切れはしをもとどおりに三つに畳んで指ではじいた。
「青木さんは、それでどこへ行ったんですか」
「美校だろう。三時といったら三時までにはここへ戻ってくるさ」
「あら、私はまだ行くと言っていやしないわよ」
「行きたまえ。光栄じゃないか」
「光栄ですって」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

たね子はあやうく吹き出しそうになった。
あんな汚ない男と一緒にスケッチに出掛けるのが光栄だろうか。大袈裟な——
男はじろりとたね子を睨んだ。
「あんたが不同舎へ入ったのは、男と同じように自由な絵が描きたいからだと言っていたじゃないか」
「そうよ」
「そんなら青木さんに学ぶんだな。あんたは不同舎に入ってまだ日が浅いからよくわからんだろうが、この画塾で青木さんほどの絵を描ける奴はいないね。それがわからんようならあんたの眼は節穴だ」
「まあ、節穴——」
それはそうかもしれない。だが、自分を子供扱いにするこの男はなんだろう。誘われれば、女はすぐ男のあとへ従いてゆくものだと思っているのだろうか。
利かん気を集めて、たね子の眉はぴりぴり動いた。
しかしそうまで言われてみるとあのうす汚ない身なりの画学生が、なんだか急に輝いてくるようで、十八歳の若いたね子の心に興味がないわけではなかった。
挑むように、いたずらっぽくきらきらと美しい瞳が光り出す。
黒紋付の男はもう黙々とカンバスへ向っていた。

宇都宮から、さらに四里。たね子は栃木の片田舎で生れた。生れつき絵を描くのが好きであった。紙と筆を持たせておけばおとなしく、一日中でも絵を描いて飽きるということのない一風変った娘であった。

生家は呉服屋で、呉服の他にも肥料の商いを手広くやっており、暮し向きは豊かな上に漢学者の父豊州は、きわめて進歩的な考えの持主でもあった。子供の教育には厳格な半面、三人の娘のうち気性の激しい次女のたね子を溺愛し、絵が好きなら好きなようにさせればいいといったふうであったから、たね子は我がままいっぱいに育った。

村の小学校を卒えると、父の漢学塾へ入れ、そのかたわら日本画の勉強もさせた。

両親は、たね子を画家にする気は少しもなかったが、器用に絵を描く娘を好ましく見守っていたようだ。

たね子は今日もせっせと絵を描く。

姉にたのまれていた刺繍の下絵を丹念に写しとると、縁側へ出て思いきり両手を天に伸ばし、あーアと大きな欠伸をした。

「もう出来たの」

座敷から、明るく姉の声が追ってくる。

たね子は憂鬱だった。

「もう出来たの、たねちゃん。あら素的ね。私これ帯にするわ」

「そう」
たね子の眼は、庭隅の、真っ赤な葉鶏頭に注がれたままだ。
「今度は蝶々を描いてほしいわ」
「もう厭よ。私この頃なんだか絵をかくのがつまらなくなって仕様がないの。蝶々だのトンボだのススキだの、いくらお手本どおりに巧く描けたって、それはつまんないことでしょ」
「あらどうしてよ」
姉は驚いてまじまじとたね子の顔を瞶める。
「私本当の絵が描きたいわ」
「本当の絵って、これは本当の絵じゃないの」
「そうよ。お手本なんか見てかく絵は本当の絵じゃないわ」
「じゃ本当の絵ってなんなの、たねちゃん」
「生き写しよ」
姉は眼をぱちくりさせた。
そんならその生き写しをやってごらんと姉が言ってくれるかと、ひそかに期待したが、姉はそれっきり出来上った花鳥の下絵を満足げに眺めているだけだった。
姉はもう直きお嫁にゆく。お裁縫だお料理だと夢中になっているが、たね子にとってそんな修業はみな無意味なことに思われてならない。少しは姉さんを見習いなさいと母は言う。だが、人形のように嫁ぐ花嫁は嫌いだった。

福田豊州は二人の娘を連れ、秋晴れの奥日光の、戦場ヶ原を歩いて行った。
姉妹は着物の裾を短くはしょり、ももいろの蹴出しをちらちらさせながら、父のあとになり先になりして藁草履の足を軽々と運んでゆく。
中禅寺湖から奥湯元まで三里、湯川の流れに沿って一筋の道がうねうねとつづき、その彼方に男体白根の山々が秋の澄んだ大気の中に匂うような眺めだ。
戦場ヶ原は、千町ヶ原とも言われているだけにめっぽう広い原野だが、田舎育ちの娘達は健脚を誇って馬にも乗らず、弱音も吐かずにずんずん歩く。
奥日光は豊州の生れ故郷である。近々嫁ぐ長女を連れて挨拶がてら秋の行楽をたのしみにやって来たのだ。
原野のところどころに落葉松や白樺の群生が見え、ナナカマドが赤い実をつけて秋のふかまったことを告げている。
刈萱が穂をたれて、叢の地虫は人間の足音におびえず、けろけろじーんじーん鳴きたて、赤とんぼがすいすいと飛んだ。
「もう直ぐ三本松だ。茶店はまだやっているだろう」
「人っ子一人通らないのに、本当にやっているのかしら」
家を出て今朝からもうかれこれ八時間は歩いた勘定になる。山の霊気に洗われてか、娘達は疲

れたとも言わないが茶店が見え出すと、急に元気になった。
「お父さん。大福売っているの」
たね子が訊いた。
豊州はこの道をわが家の道のように歩き馴れていた。
「ああ、駄菓子もウデ玉子も売っているさ」
たね子はみなまで聴かずに駈け出した。当然姉も一緒に駈けてくると思っていたが、
「たねちゃんは元気がいいこと」
と、きわ子は眼を細め、父の顔を見上げて笑った。
たね子が走ると足許で枯草がかさかさと鳴り、熟(う)れた草の実が薫草履の先にふれては飛び散る。
「まあ気味が悪いこと」
熊、カモシカ、モモンガーの皮が飛び込んだ茶店の軒先に吊してあって、それが売りものだとわかる前に、たね子は遠慮もなく大きな声をあげ、眉をしかめた。
茶店のおばあさんも一人で飛び込んで来たこの美しい娘に吃驚したらしく、たね子の来た方を伸び上るようにして眺めていたが、連れがあるのを認めてか、
「はいお出でなさい」
とていねいに迎えた。
父と姉が追いついて渋茶が出る。
豊州は美味(うま)そうに渋茶を啜(すす)りながらおばあさんと言葉を交わした。

「へえ、娘さんを連れて湯元まで行かっしゃるか。綺麗な娘がひとりで飛び込んでくると、わしはまた、狐の悪さかとびっくりするわなァ」

茶店のおばあさんは三つ四つも大福を平らげるたね子を見やりながらころころ笑い、店先にぶら下げているあの毛皮は、連れあいが仕とめてきたものばかりだと自慢した。

おばあさんの話では、もう湯治客は殆ど引揚げたようだ。だが、刈入れが終れば、冬の来る前に、温泉場はもう一度賑わう。茶店もそれまで閉じずに客を待つのだという。

豊州の兄が経営している杉屋は東山寄りの高いところにあって、二階建ての大きな旅館だ。正面に湯の湖を見降ろして紅葉の頃の眺めはとくに素晴らしい。しかし今は紅葉も大方散りつくした。残りの紅葉にぱっと夕陽の照り返る頃に、三人はやっと杉屋の玄関先へ辿りついた。

裾の埃を払い、広い玄関のたたきに藁草履を脱ぎ捨てると、姉妹はさすがに我慢が出来ないほどの疲れをおぼえ、そのままぺたんと帳場に坐り込んでしまった。

さあさあ奥へとうながされて、ふと見上げた壁の絵に、たね子は吸われるようにふらふらと立上った。

「まあこの絵、伯父さんこの絵は一体なんなの、誰が描いたの。これが本当の生き写しよ。ね、そうでしょ、お姉さん」

「似ているかね、お前達のお祖父さんの肖像画だよ」

「伯父さん、この絵は油絵でしょう」

似ているどころではなかった。まるで生きている人のようだった。たね子は生れてはじめて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.